2019 年 6 月 3 日放送

# 「第 82 回日本皮膚科学会東部支部学術大会 ① 会長講演より

# For Dermatology in the Future、本大会が目指すもの」

旭川医科大学　皮膚科
教授　山本　明美

今大会のテーマは 「For Dermatology in the Future 」

第 82 回日本皮膚科学会東部支部学術大会を 2018 年 10 月 6 日、7 日の会期で旭川市において開催させていただきました。旭川市での開催は 2003 年に飯塚一名誉教授が第 67 回の大会を開催されて以来、15 年ぶりのことでした。

今大会のテーマは 「For Dermatology in the Future 」とし、これまで私たちが受け継いだ多くの先輩からの知的財産をこれからの皮膚科学の担い手にどのように残し、継承・発展させてもらうかを考える機会としていただきたいと考えました。

はじめに少し旭川医科大学医学部皮膚科学講座の歴史を紹介させていただきます。

私どもの講座は 1976 年に大河原章先生を初代教授として開講いたしました。その後、1986 年から飯塚一名誉教授が 2 代目を、そして 2014 年から私が 3 代目の教授をつとめています。

本学会の開催にあたり多大なるご支援をいただいた同門会は 1989 年に水元俊祐先生を初代会長として発足し、2009 年からは現在の松尾忍先生が会長を務めてくださっています。

会員数は約 100 名で、年に 2 回の同門会主催の症例検討会を開催し、また優れた論文発表をした会員や、地域医療に多大な貢献をした会員に対して、同門会学術奨励賞を授与するという学術的な活動をしています。

## 当教室の企画

今学会では、私どもの教室は将来の皮膚科に残せるどのような知的財産を築いてきたのかを皆さまに知ってもらうため企画を設けました。

まず、大河原章先生、飯塚一先生、高橋英俊先生、そして現在の准教授の本間大へと代々継続してきた乾癬の臨床・基礎研究の流れをシンポジウムとして高橋英俊先生に組んでいただき、教室からは飯沼晋が発表しました。

また、教室では大石泰史、上原治朗、土井春樹、松谷泰祐が皮膚悪性腫瘍の診断、治療の中心となって活躍してくれており、今学会では本学の第 2 病理学教室の大栗敬幸先生とのメラノーマの腫瘍免疫についての共同研究をふまえ、上原治朗が悪性腫瘍のシンポジウムを企画しました。

また、同門の橋本喜夫先生は漢方を専門としていることから、「バイオの時代こそ漢方薬を診療に」と題したシンポジウムを企画していただきました。

准教授の本間大は無汗症のバイオマーカーの臨床研究を行っていることから、「皮膚疾患とバイオマーカー」と題したシンポジウムを組み、本学の臨床検査医学講座の藤井聡教授にもご講演いただきました。

また、教室の岸部麻里が皮膚科内で膠原病外来を担当していることから、膠原病関連のシンポジウムも開催しました。演者は各地の大学で活躍している若手の皆さまにお願いしたことが功を奏して、新鮮味のある企画となりました。

教室の堀仁子が皮膚科心身医療をサブスペシャリティとしていることから、東部支部で初めて皮膚科心身医療のシンポジウムを開催しました。参加した方々からめったに聞くことのなかった内容で、勉強になったと感謝の言葉をいただき、大変うれしく思っています。

また、私どもの教室は自前で病理標本の作製と診断を行っている数少ない教室のひとつ

です。現在病理診断は堀、岸部、藤井と私が主に担当していますが、年間 2,300 検体以上の病理標本を受け入れているので、その中から菅野恭子が厳選した症例を CPC に使わせていただきました。参加した各大学の先生に喜んでいただけたようでほっとしております。

**講演内容**

さて、今学会のテーマは「For Dermatology in the Future」ということで、将来一人でも多くの若者が皮膚科を専門領域に選んでくれるように、医学部学生は参加費無料とし、「学生さんへのメッセージ」セッションにて大阪大学の玉井克人教授と杏林大学の大山学教授に皮膚科学の面白さを語っていただきました。道内外から 40 名近くの学生さんがこの講演を聞いてくれました。その効果が楽しみです。

特別講演では旭川医科大学学長の吉田晃敏教授に「クラウド国際遠隔医療を目指して」と題してご講演いただきました。本学がいま最も力を入れているグローバル医療の先進的な取り組みの数々をご披露いただき他大学の皆さまに大きなインパクトがあったものと思います。

また、文化人講演は経済評論家、勝間和代様に「男女共同参画を阻む無意識の差別とは」と題してお話しいただきました。会場には 250 名もの来場者を得ることができました。最近話題となりました東京医大の入学試験の女性受験生の成績を一律に減点していた件にみられるように、医療界では女性差別が根強く残っていますが、この講演を聞いていただいた皆さまの考えが少しでも変わってくださることを期待しています。

また、社会の高齢化に伴って増えている下肢潰瘍の外科的・先進的な治療について旭川医科大学外科学講座の東信良教授にご講演いただき、耳鼻科の高原幹先生には掌蹠膿疱症の扁摘治療についてご講演いただきました。

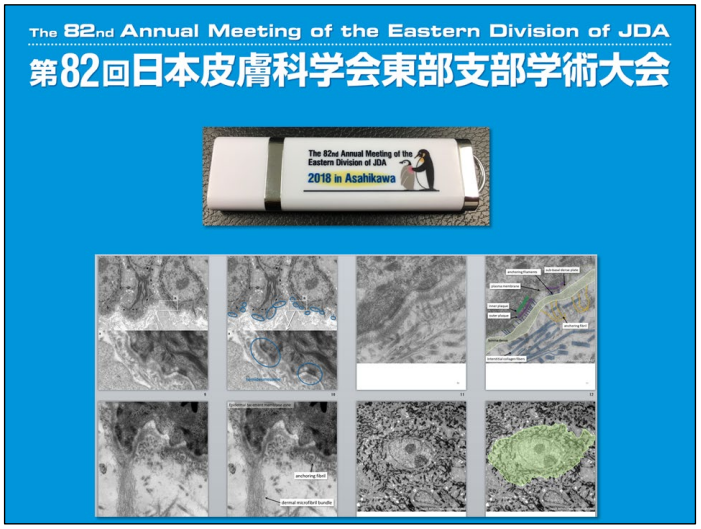
当教室では医学英語教育にも力をいれており、本学の非常勤講師をつとめていただいていた、現在日本大学医学教育センター准教授の Eric Jego 先生に外来診療での英会話について教育講演をお願いしました。

海外からの招請講演としては、私の長年の友人でもある英国キングスカレッジの John McGrath 教授が遺伝性皮膚疾患の診断と治療の現状と将来について、さらに米国カルフォルニア大学サンディエゴ校の Anna Di Nardo 先生には皮膚自然免疫のマスターレギュレーターとしての肥満細胞の多彩な機能についてご講演いただき、最先端のサイエンスに触れることができました。

さて、私の専門領域は電子顕微鏡法（電顕）を用いた皮膚科研究です。しかし、私の師匠であったイギリスの Robin Eady 先生も、電顕の世界的権威であった Ken Hashimoto 先生も 2017 年にお亡くなりになり、Ken Hashimoto 先生の名著、「皮膚の電顕のみかた」も絶版となっていて、現役の皮膚科電顕研究者はほとんど残っておりません。

そこでかろうじてまだ現役で電顕をやっているものの一人として、なんとかこの研究手法を若手に伝えていかねばと考え、今回は参加者への記念品として、私と教室の井川が撮っ

た正常皮膚の電顕写真を解説とともに電子データで USB メモリーに入れてお配りしました。製作にはかなり時間を要しましたが、これが欲しくて学会に参加しました、と言ってくださる方もおられて苦労した甲斐がありました。画像は講義や講演などに自由にお使いいただき、電顕を後世に伝える手段の一つとして役立てていただければ幸いです。 この USB メモリーは手元にまだ若干の在庫がございますので、ご希望の方はご連絡ください。




また、旭川市の隣町、美瑛町で私の近所にお住まいの写真家、中西敏貴氏による美しい美瑛地区の写真と撮影秘話が盛りだくさんのトークショウも開催しました。翌日の祝日には実際に美瑛の丘をご覧になってからお帰りになった方も多かったようです。

懇親会では北海道らしい食事や旭川医大ダンス部のパフォーマンス、旭川市のゆるキャラ、アサッピーの登場と参加者の皆さまに楽しんでお過ごしいただけるよう色々と工夫をこらしました。

また、今回の東部支部学術大会はその直前の 10 月 3 日夜から 5 日にかけて同じ会場で皮膚かたち研究学会（SSSR）とヨーロッパの形態研究の学会（SCUR）のジョイント学会をサテライトミーティングとして開催しました。

事務局長の堀仁子が懇親会の内容や参加記念品の選定など、すべてにわたってアイディアを活かし、心配りの行き届いた学会運営をしてくれました。海外からの参加者にも大変喜んでもらえましたし、学会参加者数は、英語が公用語の国内学会としては破格の 108 名と大勢の方にお越しいただきました。英語の学会をうちが主宰できた、ということで一つ自信をつけることができました。

今回、学会開催にあたり、多くの機関からご助力をいただきました。特に山田紀子様ほか、日本皮膚科学会の総会・学術大会チームの皆さまには大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。